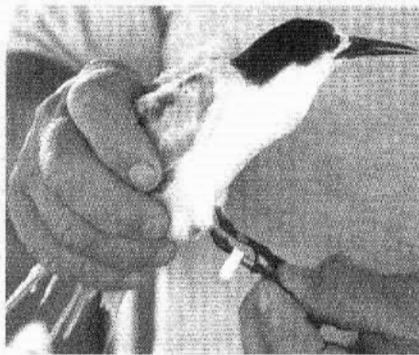


ベニアジサシの越冬地 新発見

日本で繁殖 豪で越冬

日本で繁殖期に足環を付けたベニアジサシ（カモメ科）が、今年1月に約6千キロ離れたオーストラリアの東海岸、グレート・バリアー・リーフで確認された。これまでに台湾とフィリピンで確認されているが、いずれも越冬期の記録ではなく、これまで謎であった東アジア地域で繁殖するベニアジサシの越冬地が、今回初めて明らかになった。ベニアジサシは世界的にも個体数が少なく、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されていて、今回の越冬地の発見は保護管理上も貴重な記録となる。渡り鳥に足環などの標識を付け、その後の経過を追う標識調査は、山階鳥研が環境省から委託を受け実施している。

日本で標識したベニアジサシが発見されたのは、グレート・バリアー・リーフの南部にあるサンゴ礁、スウェイン・リーフで、1月8〜12日に調査を行ったクイーンズランド公園野生生物局の職員、ポール・オニール氏などが確認した。オニール氏はこの調査で、159羽を捕獲。そのうち19羽に日本の環境省足環がついていた。連絡を受けた標識研究室が足環の



▲スウェイン・リーフで捕獲された日本の足環がついた個体（今年1月撮影 オニール氏提供）



番号から調べたところ、18羽は沖縄本島周辺の無人島などで、残る1例は福岡県大牟田市三池島で放されていたことがわかった。なかには13年前に放された個体もいた。尾崎清明室長は「1975年以

来、25年間に約9千羽に標識してきて、やっと苦労が報われた感がある。この発見を受けて、今後両国間で標識調査を実施し、さらに詳細な周年生態を解明することが期待される」と話している。